

ネオリベ現代生活 批判序説

白石嘉治・大野英士 編

[四六上製 264頁 定価2310円 新評論刊]

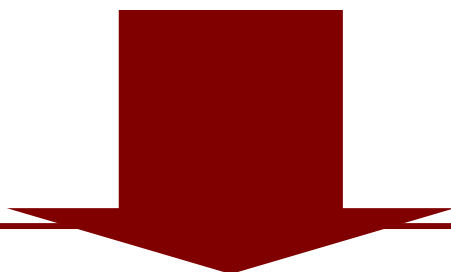
私たちは、「ネオリベ」という言葉をこの本によって知った。
われわれの生存と活動を統治すべく悪あがきするネオリベは、
本書からはじまる闘争によってもはや敗北しつつある。
ネオリベラリズム批判の出発点。

[インタビュー]

入江公康	労働
樫村愛子	精神分析
矢部史郎	運動
岡山茂	大学

本書「結 批判——取り戻すべきものは何か」より
「……ポストネオリベラリズムの手がかりとなる第二の論点とは、
ベーシックインカム(basic income)である。
それは「基本所得」と訳しうるものだが、
(…)とりわけヨーロッパにおいて、
ネオリベラリズムが台頭した1980年代以後、
それに対抗する軸となる構想として議論が重ねられてきた。

で、次なる戦略、「ベーシックインカム」へ進もう。



ベーシック・インカム・ティーチン
第 1 回

なぜ ベーシック・インカム なのか



ベーシック・インカム

——それはすべてのひとが、その生を営むのに必要なお金を無条件で保証されることです。資産／労働／性別／婚姻／年齢／障害の有無などを一切問われことなく、ひとはただその生存のゆえに、ベーシック・インカムを要求するのです。

ベーシック・インカムを考えると、それは「労働」「生産」「生存」といった問題をあらたな視点からみなおすことを意味します。それ以上に、わたしたちの手に「政治」をとりもどすことです。

「格差社会」や「勝ち組」「負け組」の二極化などが、政府やマスコミにまで問題にされるようになり、いまや格差や不平等への関心がこれまでにないほど高まりつつあります。そこでは、より豊かな生活を送る人びと（持てる者）と、より貧しい生活を強いられる人びと（持たざる者）との間の格差が開き、なおかつ固定化しつつある、ということが言われています。このような「格差」や「不平等」への関心の広がり比べると、より貧しい生活を強いられる人びと（持たざる者）の生そのもの、あるいは「貧困」そのものへの関心はそれほど広がっていません。

しかし実際には私たちはみな「貧困」ではないでしょうか。餓死のような極端な事例をあげるまでもなく、安定的な住居を持たず、吹雪の夜でも路上のダンボールで眠るしかないホームレスや、週に6日の労働に精を出しても貯金もままならないフリーター、「奨学金」という名の何百万もの負債・借金を背負われ、なおアルバイトで収入を補わないと学業を続けられない大学院生、少ない夫の収入でやりくりしながら子供のランドセル代をどうにか捻出する主婦、1年に500万以上稼ぎながらも毎月10万以上の住宅ローンに終われる正規労働者（賃金奴隷）にいたるまで、私たちはみな貧しく、そして不安定なのです。

貧困が貧困として語られることが少なくなった傍らで、それは確実に回帰しつつあり、それを担う階級を指摘することさえできます。たとえば「プレカリアート」という呼称は、こうした私たちの不安定な生＝労働のあり様を端的に名指すものではないでしょうか。

いずれにせよ、問題なのは、私たちの「貧困」であり、生活を回していくに足るお金がないということです。それならば、私たちは、ベーシック・インカム——その生を営むのに必要なお金を無条件で保証されること——をもっとおおらかに要求していいものではないでしょうか。

そういうわけで、いまこそベーシック・インカムについて考え、語り合い、そして要求としてたちあげるべき時だと私たちは考えています。

そのためにベーシック・インカムについて公開で討論する場をもつことにしました。

第1回目では、ベーシック・インカムについての認識を共有するとともに、いくつかの現場からベーシック・インカムについて発言してもらおうと思います。

ベーシック・インカムに関心のある方はもちろん、これに異議のある方もぜひご参加ください。

ベーシック・インカム・ティーチン 第1回 なぜベーシック・インカムなのか

【講師】 山森 亮

【発言】 フリーター、野宿者運動、学生、家賃廃止 他

日時: 5月26日(土)午後5時より

場所: 上智大学四谷キャンパス 9号館2階256教室(四谷駅下車徒歩2分)

上智大学アクセス www.sophia.ac.jp//sogo.nsf/Content/access_yotsuya

キャンパスマップ www.sophia.ac.jp//sogo.nsf/Content/campusmap_yotsuya

主催/ベーシック・インカム研究会・東京 協賛/『VOL』(以文社 www.ibunsha.co.jp/)

ベーシック・インカム宣言

人の命は大事だと誰もがいう。であるなら、人の命がお金が無いために奪われることはあってはならない。そうした合意の上に、社会権や憲法25条だとか、福祉国家というものが築かれたはずだった。ところが実際に行われたことは、人の命の等級付けであり、低く見積もられた命の廃棄であった。そうした分類の政治、廃棄の政治を拒否する。当たり前の、本当に慎ましい要求は、**ベーシック・インカム**である。全ての人、その生を営むのに必要なお金を無条件で保障されなくてはならない。生きていくことは支払われるに値する。市民としての義務は、生きることが保障されなくては、果たしようがない。「衣食足りて礼節を知る」とはそういうことだ。

繰り返しておこう。重要なのは、〈すべてのひとに無条件で〉支払われることである。ベーシック・インカムにおいては、われわれは誰も何者であるかを問われることはない。ひとの生を分断するような序列化はすべて拒否され、あらゆる生のあり様が無条件に肯定される。働いているか否か、男か女か、老いているかいないか、などの差異に基づいて構成された人間のヒエラルキーを拒み、よりラディカルな平等の地平を眼差すことが可能となる。

ベーシック・インカムの下では、ひとは生存のために必ずしも働かなくてもよい。このように生存のための労働からひとを解放するベーシック・インカムの要求はだから、生存のために労働を強制する資本主義社会の秩序に根源的に敵対しうるものであった。それはまた、支払われる労働から排除されてきた者、不払い労働を強制され——それゆえに拒否し——てきた者など、〈分け前〉を不当に少なくか／あるいはまったく用意されてこなかった者の、その分け前を登録することによって、そこに不和を生じさせるものでもある。

これまで分け前を用意されてこなかった、非正規労働者も、野宿者も、学生も、女も、子どもも、外国人も、ベーシック・インカムを当たり前要求してゆくこと、分け前なく者がその分け前を登録し、そこに不和を生じさせること。ベーシック・インカムの要求は、それゆえに、政治を私たちの手に取り戻すことなのである。